

展示のごあんない

3つの展示エリアで構成する島根悠久の歴史と文化。

神話展示（P17〜18）

出雲は多くの神話の舞台となっています。迫力ある映像や音響で、出雲神話を体感できます。





総合展示（P1〜4）

特色ある島根の歴史を、原始から近現代まで時代順に紹介します。

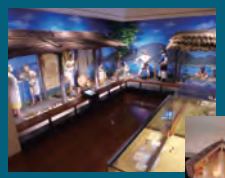




テーマ別展示（P5〜16）

出雲大社の巨大柱、日本最多の銅剣・銅鐸、そして全国唯一の完本出雲国風土記は私たちに何を語りかけるのでしょうか。







中央ロビーを飾る
出雲大社境内出土の宇豆柱と心御柱（複製品）

総合展示

◎島根の人々の生活と交流（P1〜4）

原始・古代から近現代に至る人々の生活と交流の姿を紹介します。とくに「たたら製鉄」をはじめ「弥生王墓」「出雲の玉作」「石見銀山」など全国的にみても特色ある島根の歴史・文化について重点的に紹介します。

テーマ別展示

◎出雲大社と神々の国のまつり（P5〜8）

発見された巨大柱、1/10スケールのいにしえの本殿復元模型などから、出雲大社の源流やその特質について考えます。また、神在月の伝承とまつり、エビス、ダイコク、福の神など庶民に親しまれている出雲の神々の歴史に迫ります。

◎出雲国風土記の世界（P9〜12）

奈良時代の村落、朝酌の地にタイムスリップ。当時の市場の喧騒、愛を語らう男女…人々のくらしに迫ります。

◎青銅器と金色の大刀（P13〜16）

県内出土の弥生青銅器を一堂に集め「青銅器の国・島根」の謎に迫ります。古墳時代では卑弥呼の鏡ともいわれる三角縁神獣鏡や、金・銀・銅で飾られた大刀を紹介し、出雲と大和の関係を探ります。

神話展示

◎神話回廊（P17〜18）

あなたは、出雲神話を彩る神々やヤマタノヲロチをイメージできますか？「神話シアター」では、『古事記』『出雲国風土記』に登場する神々の物語を迫力ある映像で紹介します。

1 島根の人々の生活と交流

弥生時代の出雲に王さまがいたって本当ですか?



出雲市 西谷3号墓墳丘模型

「王さま」はいつからいたのでしょうか?

旧石器・縄文時代には王さまがいた様子はありません。ところが米づくりがはじまった弥生時代には、王さまといえる有力な人物が登場したようです。その証拠が巨大なお墓。それまでにはなかった小山のように大きなお墓がつくられ、王さまらしき人物が葬られるようになったのです。王さまは出雲地域の代表者として九州、岡山、北陸地方をはじめ、中国や朝鮮半島の国々ともつながりをもっていたようです。お墓のなかには、各地との交易によって手に入れた珍しいものが納められました。出雲では王さまのお墓は「四隅突出型墳丘墓」という、四隅が突き出た独特の形でつくられました。

2 島根の人々の生活と交流

玉にはどうやって穴をあけたのですか?



松江市上野1号墳
出土勾玉・管玉

古代の出雲では、弥生時代から平安時代まで、約1000年もの長い間、玉をつくりつづけていました。出雲の玉づくりは、松江市玉湯町の花仙山でとれる碧玉やメノウを使っているのが特色で、おもに透明感のある赤色の勾玉や深緑色の管玉をつくっていました。

この勾玉や管玉はネックレスとして使われたようですが、ひもを通すための穴は一体どうやってあけたのでしょうか?玉の穴をよ〜く見ると、工具を回転させて穴をあけたあとがあり、石や鉄のキリが使われたことがわかります。しかし、その玉をどうやって固定して、どんなふうにキリを使って穴をあけたのか、よくわかっていません。まさに現代ではまねのできない、古代の職人技といえるでしょう。

3 島根の人々の生活と交流

「石見銀山」には銀がどのくらいあったのですか?



御取納丁銀

石見銀山がもっとも栄えたのは、今からおよそ400年前の戦国時代から江戸時代のはじめにかけてです。

銀が一番よくとれていたころには、1年間に38トンもの銀がとれたといわれています。38トンというと、写真の丁銀になおすと237，500枚なんてものすごい数になるんです。

石見銀山でとれた大量の銀は、おもに朝鮮・中国との貿易に用いられ、その質のよさからも、世界的に有名でした。

ちなみに、写真の丁銀は「御取納丁銀」といって、毛利氏が天皇に献上したものです。たった1枚しか残っていませんが、1560年ごろに石見銀山の銀でつくられたと伝えられています。

4 島根の人々の生活と交流

むかしの島根は全国一の工業地帯だった?



日刀保たたら
《日本美術刀剣保存協会提供》

私たちの社会や生活をささえる鉄。日本では、古くから「たたら製鉄」とよばれる独自技術が伝えられてきました。たたら製鉄とは、ねん土でつくられた炉のなかで、木炭を燃やして砂鉄をとかし鉄をつくる技術です。たたら製鉄はすくなくとも古墳時代の後期（6世紀）には行われていたと考えられ、島根でも全国最古級の製鉄炉が見つかっています。

その後、たたら製鉄は江戸時代の後半から明治時代にかけてもっとも発達します。なかでも質のよい砂鉄がとれ、豊富な森林資源にめぐまれた島根は全国一の鉄生産量をほこっていました。とくに1882（明治15）年には、全国の生産量12，200トンのうち島根は6，400トンと、半分以上を占めていたという記録が残っています。

1 出雲大社と神々の国のまつり

いにしえの出雲大社は高さ48メートルの超高層神殿だった?

「今から1100年前ほどの平安時代なかごろ、高さ約48メートルの高層本殿があった」という伝承があり、展示室でひときわ目を引くこの大きな復元模型は、その説によって、建築学者の福山敏男博士（故人）が監修し、建設会社の大林組が設計した案にもとづくものです。柱の太さはいずれも3メートル以上、階段の長さは約109メートルもあり、その大きさにはおどろかされます。

近年、出雲大社の境内から、スギの木を3本たばねた直径が約3メートルもある巨大な柱が出土しました。鎌倉時代の大本殿のあとが発見されたのです。

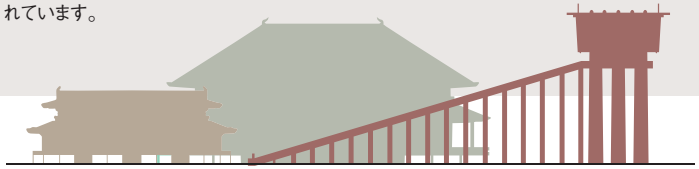
はたしていにしえの神殿はどのような姿をしていたのでしょう。なぞ解きはこれからもつづきます。



平安時代の出雲大社
本殿10分の1模型
〈出雲大社所蔵〉

「雲太・和二・京三」

平安時代の社会科教科書のような書物『口遊』のなかに、当時の大きな建物ベスト3が書かれています。それが、「雲太、和二、京三」。雲太とは出雲大社が一番、和二とは大和の東大寺大仏殿が二番、京三とは平安京の大極殿が三番という意味です。「大仏殿が高さ約45メートルだったので、出雲大社はそれ以上あった」というあかしだとされています。



平安京 大極殿　東大寺 大仏殿　出雲大社 本殿

いにしえの平面図

この図は、いにしえの本殿の平面図と考えられているものです。書かれた文字をすなおに読めば、柱の直径が約3メートル、階段の長さが約109メートルです。古代に大本殿が存在したかどうかをめぐって、必ず議論が集中する史料のひとつです。福山博士の説の大きな根拠となっています。

金輪御造営差図
〈千家家所蔵〉

鎌倉時代の巨大柱、あらわる!

2000（平成12）年に、出雲大社の境内から発見された巨大な掘立柱のひとつです。大きなスギの材を3本1組にして、1本の巨大な柱にしています。直径約3メートルという、たたみ8畳の部屋がいっぱいになるほどの大きさで、これまでに例のない規模と構造です。鎌倉時代、1248年に建てられた大型の本殿をささえたと考えられます。

出雲大社境内遺跡出土「心御柱」

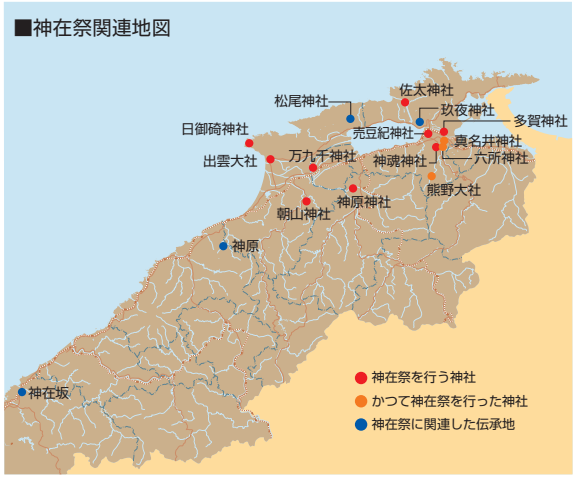
2 出雲大社と神々の国のまつり

毎年10月、出雲に神さまが集まるって本当ですか?



出雲大社神迎祭
〈出雲大社提供〉

旧暦10月、出雲大社（出雲市）、佐太神社（松江市）、万九千神社（斐川町）をはじめとするいくつかの神社で、日本中の八百万神をおむかえして、もてなし、やがてお見送りするという神在祭が行われます。お集まりになった神々は、酒づくりや縁結び、五穀豊穣など、いろいろな内容の会議をされるといわれています。神社だけではなく、各地で神々をむかえて、まつり、見送るためのさまざまな風習が伝えられてきました。そこで、出雲地方ではこの月を「神在月」とよぶのです。いっぽう出雲以外の全国では、「神無月」とよんでいます。その理由として、「出雲へ神々が旅立たれ、留守になるからだ」という伝承が、平安時代からあったことが知られています。



神在祭の伝承

神在祭は、現在、図の9つの神社で行われています。このまつりを「お忌みさん」ともよんでいます。歌舞音曲を禁じ、厳重な潔斎をして、静かに忌みつつしんでおまつりしてきたことがうかがえます。「お忌みさん」のあいだ人々は神々の会議を邪魔しないように、大声をだしたり音を立てたりしないで静かにすごすこととされています。

龍蛇さん ～八百万神の先導役～

毎年、人々に、出雲の地へ八百万神がお越しになったことを知らせる役目を果たしてきたのは、「龍蛇さん」でした。北西の季節風がふきつけるなか、日本海の荒波にもまれて、南の海でくらすウミヘビが、出雲地方の沿岸部に流れ着くのです。今でも、神々の先導役、龍宮からのお使いとして、人々のあつい信仰を集めています。



大社龍蛇神

ダイコクさんと縁結び

江戸時代の人が考えた、神さまたちの「縁結び会議」の様子。まんなかに座っているのは、出雲大社の神さま、ダイコクさん。男の人・女の人の名前を書いた木の札を結びつけて「縁結び」をしています。カップルが決まると、ぶ厚い、大きな帳面に記録します。右下の神さまはメガネをかけています。毎年、全国のカップルを決めなくてはいけないので、神さまも大変です。



出雲国大社之図

1 出雲国風土記の世界

風土記って何ですか?



出雲国風土記
復元品

風土記とは、各地の情報がまるごとつまったガイドブックです。誰が使ったかって?観光客ではありません。奈良時代の政府が、地方を支配するためにいろいろな情報を集める必要があったのです。風土記には、各地にどんな山や川があるか、どんな動物がいて植物が生えているか、土地の名物は何か、どうしてこんな地名がついたのか、こういったことが書かれています。風土記は、奈良時代の713年に中央政府が各地に命令してつくらせましたが、残っているのは、常陸国(茨城県)・播磨国(兵庫県)・出雲国(島根県)・豊後国(大分県)・肥前国(佐賀県・長崎県)の5か国だけ。しかもほぼ完全な形で残っているのは、『出雲国風土記』だけなのです。

『出雲国風土記』が書かれたころの出雲

現在の地形とちがっているところがあります。たとえば、東側を見てください。弓ヶ浜は、「夜見島」という島でした。次に西側を見ると、「神門水海」という大きな湖が広がっていました。斐伊川は、宍道湖ではなく神門水海にそそいでいたのです。



加賀潜戸(松江市島根町加賀　新潜戸)

『出雲国風土記』で、佐太大神が生まれ、その母神が金の弓矢で射通したところだと伝えられています。風土記には、ここを通る時、大きな音をたてないと神が現れて船を転覆させると書かれています。明治時代に小泉八雲がここを船で訪れた時、船頭が石で音をたてたそうです。これは風土記に記された習慣が千年以上も語り継がれてきたことを示しているのかもしれません。





来美廃寺の瓦(松江市)

風土記の時代のお寺の屋根を飾っていた瓦です。当時、瓦はお寺以外ではほとんど使われなかったので、瓦が出土するとお寺のあとだとわかります。

2 出雲国風土記の世界

むかしの人は どこで買い物をしていたのですか?



朝酌(あさくみ)の市(いち) 模型

それは市場です。奈良時代の出雲の市場のひとつは、松江市朝酌(あさくみ)町にありました。朝酌は国庁(こくちょう)（今の県庁）から隠岐の島へ行くルート上にあり、渡し船もありました。ここは交通が便利なところで、入海(いりうみ)（現在の中海や宍道湖）や北ツ海(きたつうみ)（日本海）でとれた魚、山でとった動物、薬草なども集められました。さらには、農作業に使う道具や土器なども売られていたと考えられます。市場には、さまざまな人々が集まりました。お金も使っていたようですが、おもに米や布などがお金のかわりをしていました。売っている人もさまざまです。なかには豪族やお寺などの有力者も品物を売りにやってきました。そんな人はすごくいばっていたのかもしれません。



市場で魚を売る人

手にしているのはスズキです。この時代、スズキは出雲の特産品で奈良の都に送られて、天皇も食べていました。オオクニヌシの神さまが国を天皇の先祖におゆずりした神話のなかにも、スズキの料理でもてなしたとあります。



土器を焼く人

朝酌の市場の近くには大井里(おおいのさと)という場所があって、須恵器(すえき)という朝鮮半島からつくり方が伝えられた土器を焼いていました。飲食で使う土器なども朝酌の市場に品物としてならべられたと思われます。

1 青銅器と金色の大刀

どうしてこんなにたくさんの銅剣がうめられたのですか?



見つかったばかりの銅剣

1984（昭和59）年、見つかったばかりの荒神谷遺跡の銅剣です。その数、なんと358本。発見当時、日本全国で見つかっていた銅剣をすべて集めても300本にもみたなかったのに、荒神谷遺跡では、その数をはるかに超える銅剣が1か所から見つかったのです。

この銅剣、はるか2000年もむかし、弥生時代の人々が「たからもの」として大切にしていたもののようです。と、いわれても「えっ?これが、たからもの?」と首をかしげてしまいそう。

なぜ、「たからもの」がこんなにたくさんうめられてしまったのでしょう。じつは発見された銅剣を、くわしく調べるとなぞを解くヒントが隠されているのです。



土を落とした銅剣

あなたは、銅剣が緑色だと思っていませんか。

銅剣の成分をくわしく調べ、2000年前のすがたを復元してみると、弥生時代の人々が見ていた銅剣が、金色に光るとてもきれいなものだったことがわかりました。このかがやきを見れば「たからもの」というのも納得です。



成分の配合比のちがいで色がことなる

人々はどのようにして銅剣を手にいれたのでしょう。

358本の銅剣は、よく似たかたちのものばかり。あちこちからかき集めた、というよりは、短い期間でまとめてつくった、と考えるほうがよさそうです。島根県で銅剣をつくった証拠は見つかっていませんが、これほどたくさん見つかったところをみると、近くでつくられたのかもしれません。つくられた当時、1本が600〜800グラムともいわれる銅剣。358本分の原料を入手するだけでも並大抵のことではなかったことでしょう。



荒神谷遺跡出土銅剣（国宝　文化庁所蔵）

そして、ようやく手にした同じ形の銅剣。

銅剣は、いくつか小さな村が合併し、大きく強い1つの村へと成長するため、新しく考え出されたシンボルだったと考えられます。銅剣は、「わたしだけのたからもの」でなく、村と村とがおたがいのきずなを確かめあい、さらに結束を強めるために必要な、かけがえのない「たからもの」だったのです。

それほど大切な銅剣を、なぜうめてしまったのでしょう。

見つかった銅剣は、きれいに並べられていました。また、銅剣のすぐそばからは、同じくらい大切にされていた銅鐸と銅矛が見つかりました。ここは、たからものをうめるために選ばれた特別な場所だったのでしょうか。

銅剣344本には「×」の刻印が残されていました。これには、どのような意味がこめられていたのでしょう。うめなければならなかったそのわけとともに、これらのなぞを読み解くことを弥生人は簡単には許してくれそうにありません。





荒神谷遺跡銅剣埋納 想像模型

2 青銅器と金色の大刀

銅鐸って何に使うんですか?

教科書にものっている、どこかで見たこと、聞いたことのある物体、その名も「銅鐸」。加茂岩倉遺跡では39個もの銅鐸が一度に見つかりました。今まで気づかなかったけれど、よ〜く見ると、この形かなり個性的。バリエーションは多いし、地味・派手どっちもあり。おまけにサザエさんのヘアスタイルみたいに丸いお団子がくっついたものまである。これって、みんな、同じ「銅鐸」なの?いったい、どうやって使ったの?
弥生時代になって日本へ伝えられ、またたく間に弥生人をとりこにしたにもかかわらず、やがて姿を地中へと消し去る運命にあった、「銅鐸」。
さあ、なぞ解きに出発しましょう。



加茂岩倉遺跡出土銅鐸
（史上最多の 39 個 国宝 文化庁所蔵）

出会いはいつも突然に

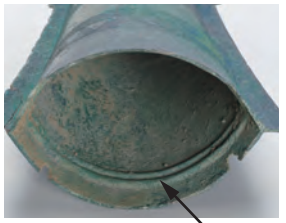
銅鐸は偶然見つかることが多く、おもしろエピソード満載の発見伝が、数多く伝えられています。銅鐸の形のちがいや使い方に頭をひねったのは、あなただけではありません。江戸時代の高名な国学者をはじめ、現代の考古学者までも、大いになやませているのです。



いろいろな形と大きさの銅鐸

ヒントおしえます

銅鐸の使い方のヒントは、内側にありました。内側にある突帯がすり減った銅鐸があるのです。なかにつるした棒が何度もあたることで、すり減ったのでしょう。銅鐸は、音を出す道具だったのです。タテチョウ遺跡（松江市）では、銅鐸のなかにつるすとちょうどよい石の棒が見つかっています。弥生人にとって銅鐸の音色は、豊かなみのりをいのる村人たちの気持ちを、神へと届ける聖なる音色だったのでしょう。



突帯



ゴージャス

一方で、鳴らした痕跡がない銅鐸もあります。弥生時代も終わりに近いころ、近畿地方や東海地方で登場した巨大で派手な、音を出さない銅鐸です。音を出さなくても、その存在だけで神とつうじることができる最も進化した銅鐸なのです。しかし、島根ではこの巨大な銅鐸が使われた証拠は見つかっていません。いち早く銅鐸を使ったまつりから決別したのでしょう。



1 神話回廊

ヤマタノヲロチは本当にいたのですか？



素盞嗚尊出雲の簸川上に八頭蛇を退治し給ふ図

少なくとも古代の人々は、ヤマタノヲロチは本当にいたのだと信じていたのでしょう。『古事記』を読むと、ヤマタノヲロチは赤い眼をして、背中にはスギやヒノキが生えていて、8つの頭と8つのしっぽがあって、たくさんの山や谷をまたがるほどの大きさで、腹は血にただれていたと書かれています。なんだかわからないけど、すごいバケモノですね。では、その正体は…。いろいろな考え方がありますが、山の精霊のようなものとも考えられます。ヤマタノヲロチは、人間たちが山の奥の谷間を開発するような自然破壊を行った時に出てきたのでしょうか。ヤマタノヲロチはスサノヲノミコトが酒をのませて退治したところ、蛇の形をしていました。

変化するヤマタノヲロチ

『古事記』を読んだだけではわけのわからないヤマタノヲロチですが、江戸時代になると神楽で舞われるようになりました。神楽とは、笛やたいこなどの楽器を奏でながら舞って神々の物語を人々に伝えるものです。神楽に登場するヤマタノヲロチは、竜のような姿をしています。



奥飯石神職神楽

クシナダヒメが何だか変だ！

江戸時代、伊賀多気神社（奥出雲町）に奉納された絵馬。スサノヲノミコトが剣をぬいて、ヤマタノヲロチを待ちかまえています。そのとなりにいる女性はクシナダヒメです。このクシナダヒメ、実は変です。『古事記』によると、クシナダヒメはヤマタノヲロチがおそってくる前にすでにクシに変身してしまっているはずなのに…。



八岐大蛇絵馬



竜の胴体部分　日本図〈称名寺所蔵・神奈川県立金沢文庫保管〉

えっ！竜が日本を囲んでる？

これは、鎌倉時代につくられた日本地図です。上が南で、下が北です。よく見ると、日本列島を囲むように、竜がえがかれています。モンゴル帝国が日本にせめてきた後、竜の姿をした神々が、日本を守ってくれていると信じられるようになりました。その一方で地震が起きると、それは竜のしわざだとも考えられていました。

施設案内
館外

柱の並木道2

島根の歴史を語る上で欠かせない重要なたたら製鉄。製鉄を伝えた「金屋子神」が、白鷺に乗って柱の木に舞い降りたという神話にちなんで、正面入口へ続く通路は柱の並木道です。柱の葉っぱは、縁結びをイメージさせるハート形をしています。

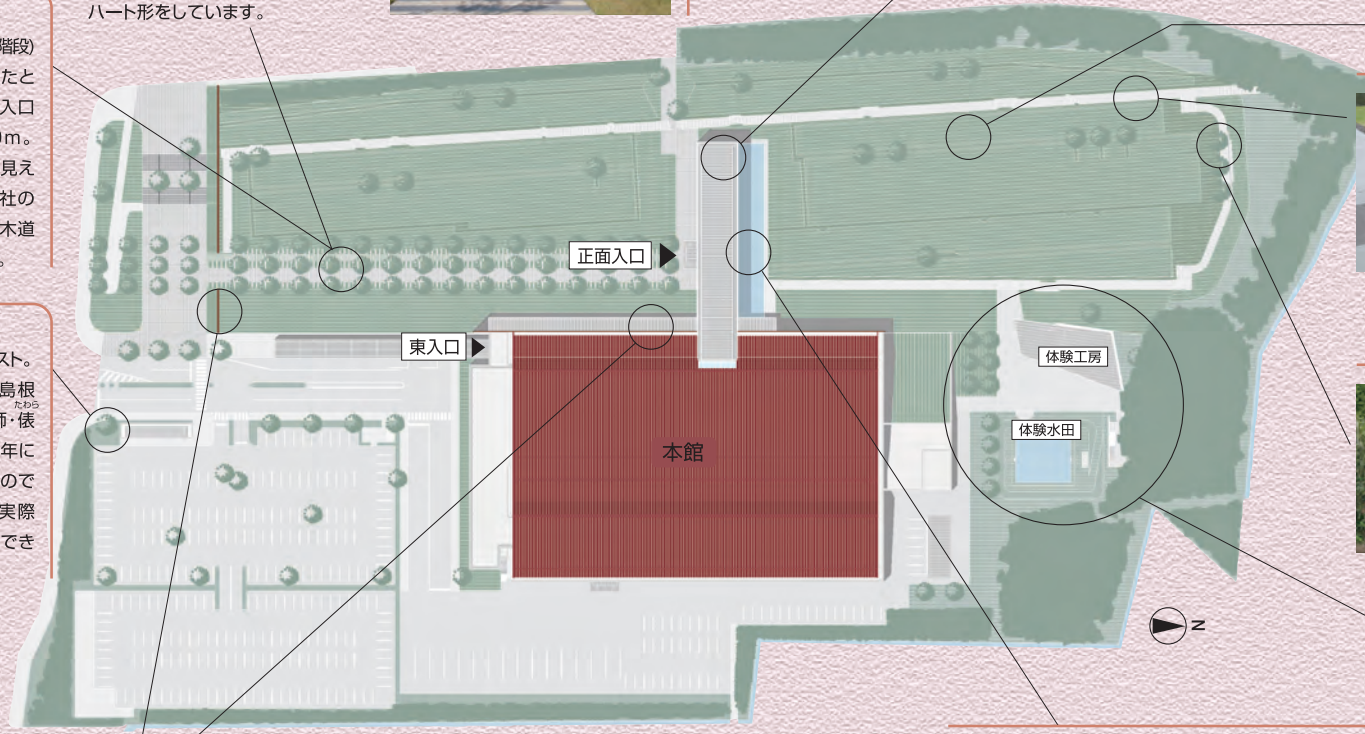


柱の並木道1

古代の出雲大社の引橋(階段)は1町(約109m)あったといわれています。正面入口への並木道も約109m。縞模様で階段のように見えませんか。古代出雲大社の壮大さを感じながら並木道を歩いてみてください。

ポスト

昔ながらの赤い丸型ポスト。なんとこのポストは、島根県浜田市出身の指物師・俵谷高七さんが、1901年に下関で開発したものなのです。もちろん、今でも実際に郵便物を出すことができる現役のポストです。



コルテン鋼の壁

本館西側とプラザの壁は赤茶色。この壁は、コルテン鋼という表面を錆びさせた鋼板です(表面の錆が内部への腐食を防ぐ特殊な鋼板)。たたら製鉄にちなみ、時代を経た鉄の重厚なイメージをかもし出しています。



ガラスのエントランス棟

全面ガラス張りのエントランス棟は、背景を透かして見るために、徹底して透明感にこだわった設計になっています。現代風の建築を通して、古代から変わらぬ北山山系の景観をお楽しみください。



風土記の庭

敷地の西に広がる庭園は、北山山系の眺めと調和し、見る人に悠久の歴史を感じていただけるよう設計されています。北山に呼応するよう穏やかな起伏をつけた庭園です。ぜひ、園路をご散策ください。

風土記の道

庭園西側の真っ直ぐな園路には、『出雲国風土記』の国引きの一節が大きな文字で彫り込まれています。読みながら歩いて、疲れたら来待石のベンチで一休み。なんと書いてあるかは水盤のそばまでいくとわかります。



泉の湧き出るベンチ

休憩ベンチの傍らの水盤には水があふれ、したたる水音を楽しんでいただけます。地下には、金属製の鹿威しがありますので、時折り響く音にも耳を傾けてください。



水盤

出雲の入り海(宍道湖・中海)をイメージした水盤の下には金属製の鹿威しが仕込まれています。このあたりには、風土記の道に書かれた文字のヒントがあります。探してみてください。





体験ゾーン

体験工房では、勾玉づくりや藍染め、和同開珎作りなどの体験学習ができます。体験水田では古代米の栽培も行っています。